

# 日本語学習者の会話におけるフィラーの研究

## —中国語母語話者を中心に—

蔡 嘉綾<sup>1)\*</sup>

1) 東北大学大学院国際文化研究科

### 1. 序論

#### 1.1 研究の背景

日本語には、「フィラー」という殆ど実質的な意味を持っていない、会話に頻繁に現れる言語表現がある。定延（1989）は、「フィラー」は談話中に話し手が行う様々な心的な情報処理操作を明らかにする機能を持ち、コミュニケーションにおいて重要な役割を果たすと述べている。

従来、日本語学習者を対象とするフィラーの分析においては、日本語母語話者と韓国語母語話者、また日本語母語話者と英語母語話者との対照研究は進んでいるが、中国語母語話者との対照研究は少ないと思われる。本稿では中国語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者の会話におけるフィラーの使用実態について考察する。

### 2. 先行研究

ここでは、中国語を母語とする日本語学習者のフィラーの使用実態に関する先行研究を取り上げる。

まず、江（2003）は、インタビュー活動を通して、2001年に台湾で日本語学科3年生と日本語母語話者との実際の会話内容を収集し、中間言語の視点から、会話ストラテジーと談話構成の側面を通じて、台湾における中・上級日本語学習者の会話実態について考察をした。その結果は、①学習者には、自分の発話に対して、「ハイ、ソウデスネ」のようなフィラーが現れる傾向があり、②単純な文でも、たくさんのフィラーが入ること、③フィラーを重ねて連続的に

使用すること<sup>(1)</sup>、④接続詞、副詞的なフィラーの誤用<sup>(2)</sup>、⑤母国語で話すフィラーや他に不適切なフィラーが現れるという結論に達した。

しかし、江（2003）の研究における、中・上級学習者の判定はおおざっぱに台湾の専門学校の日本語学科3年生と4年生としている点に、問題がある。その中には、日本語専攻の人もいれば、非専攻の人もいる。また、留学経験者も未経験者もいるため、被験者の日本語のレベルの違いによって、データの公正性に問題があると言えるだろう。他に、例えば、データ収録の場所、会話のトピック、研究者は参加するかどうかなどの説明についても不十分であり、更に詳細な考察が必要である。

また、郭（1999）では、インタビューの談話場面を設定し、教室環境学習と自然環境学習という立場から、中国語を母語とする日本語学習者におけるフィラーの発話状態を考察し、使用頻度、使用形態及び学習段階との関係を分析した。しかし、郭（1999）の研究においても学習者のフィラー使用に関する機能、役割や属性<sup>(3)</sup>との関わりなどの点についてはまだ十分に解明されていないため、この点について、更に考察していきたいと考える。

### 3. 研究内容

#### 3.1 研究資料

本稿では、東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」、2003年度の研究成果である『BTSによ

\*) 連絡先：980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41 東北大学大学院国際文化研究科

る多言語話し言葉コーパス－日本語会話1<sup>(4)</sup>(以下『BTSコーパス1』と呼ぶ)『BTSによる多言語話し言葉コーパス－日本語会話2』<sup>(5)</sup>(以下『BTSコーパス2』と呼ぶ)という公開資料を利用し、日本語母語話者及び中国語を母語とする日本語学習者におけるフィラーの使用実態を分析した。

### 3.2 研究方法

『BTSによる多言語話し言葉コーパス－日本語会話1』に収録されている男性同士と女性同士の雑談及び、『BTSによる多言語話し言葉コーパス－日本語会話2』に収録されている台湾人上級学習者と日本人の友人との雑談における属性、種類や、頻度を分析し、考察した。

## 4. 研究結果

### 4.1 フィラーにおける丁寧度

図1で示したのは、日本語学習者(TF)20代の女性10人と日本語母語話者(JF)20代の女性10人との10組分の日本語による雑談を分析した結果である。表に示されたように、「ナンカ」というフィラーの発話頻度について、母語話者160回に対して、学習者は213回であり、それぞれ全体的な39.80%と36.60%である。母語話者、学習者ともに「ナンカ」の発話頻度があまり変わらないように見えるが、談話の構造においては、学習者の方が会話の開始部から中心部、終結部までに、「ナンカ」というフィラーが頻繁に使用するのに対して、母語話者の方が会話の開始部では、「ナンカ」というフィラーはあまり見られず、会話進行につれ、中心部から終結部までに大量に使うという傾向が

図1 日本語学習者と日本語母語話者における「ナンカ」の発話状況

項目	TF (台湾人上級日本語学習者)	JF (日本語母語話者)
ナンカにおける総発話数	213回	160回
全体的フィラーの出現数	582回	402回
ナンカにおける出現率	36.60%	39.80%

図2-1 TF01-JF01 / TF02-JF02

項目	TF01	JF01	TF02	JF02
ナンカを最初に発話するライン番号	10 ライン	174 ライン	3 ライン	188 ライン

図2-2 TF03-JF03 / TF04-JF04

項目	TF03	JF03	TF04	JF04
ナンカを最初に発話するライン番号	63 ライン	30 ライン	1 ライン	86 ライン

図2-3 TF05-JF05 / TF06-JF06

項目	TF05	JF05	TF06	JF06
ナンカを最初に発話するライン番号	22 ライン	43 ライン	11 ライン	300 ライン

図2-4 TF07-JF07 / TF08-JF08

項目	TF07	JF07	TF08	JF08
ナンカを最初に発話するライン番号	66 ライン	38 ライン	13 ライン	4 ライン

図2-5 TF09-JF09 / TF10-JF10

項目	TF09	JF09	TF10	JF10
ナンカを最初に発話するライン番号	28 ライン	49 ライン	50 ライン	1 ライン

窺える。

次に、談話の構造において、「ナンカ」の発話順番を見てみよう。

BTSコーパスでは、「ライン番号」という項目を設けている。ライン番号の若い発話が必ず先に発せられていることを示す。つまり、ライン番号は発話された順序を表示することが出来る。そして、図2-1～2-5で示したように、TF01-JF01, TF02-JF02, TF04-JF04, TF05-JF05, TF06-JF06, TF09-JF09の六組では、学習者は最初に「ナンカ」というフィラーを発話するタイミングが、母語話者よりだいぶ早いということが窺える。例えば、TF01の学習者はBTSライン番号の10ラインで「ナンカ」というフィラーを発話し始めたのに対して、JF01の母語話者は174ラインの時にやっと発話し始めた。TF02-JF02組も同じである。TF02の学習

者はライン番号の3ラインで「ナンカ」というフィラーを発話し始めたのに対して、JF02の母語話者は188ラインで発話し始めた。TF04-JF04, TF05-JF05, TF06-JF06, TF09-JF09組も同様である。

鈴木(2000)によると、「ナンカ」というフィラーはもともと「何か」の撥音便形であり、もとの語「何か」が持つ未知の物事・不特定の物事・はっきりしていない物事を指示するという意味が受け継がれるという。つまり「ナンカ」は「何か」のくだけた表現形式であり、会話の開始部のような改まった場合では、あまり適切ではないと思われる。しかし中国語という言葉はあまり敬語意識を持たない言葉であるため、中国語を母語とする学習者は日本語でコミュニケーションする時に、最初から大量に使用するという傾向がある。そのため、学習者の会話は流暢に聞こえるが、あまりにも早い段階でくだけた表現を使用すると、母語話者に不快な印象を与えるという問題点が生じる可能性がある。

#### 4.2 フィラーにおける性差

次に、「マア」というフィラーの発話における男女差について考察した。

まず、図3で示したように、母語話者男女別にみると、雑談における「マア」というフィラーの発話頻度においては、男性の総出現数は70回があるのに対して、女性は1回しか出てこない。出現率においては、男性は28.92%に達しているのに対し、女性はわずか1.09%に留まっている。つまり、雑談での会話では、男性の「マア」というフィラーの発話頻度は女性より高く、ほぼ26倍近い発話量がある。次に、学習者と母語話者の「マア」における発話頻度を図4に示す。

図4で示したのは、女性の学習者と女性の母語話者における「マア」の発話頻度である。6会話で、収録

時間総計100分間の会話の中における母語話者が「マア」というフィラーを発する数はたった5回であるのに対して、学習者では、38回にまで昇っている。出現率においては、母語話者は1.87%であるのに対して、学習者は5.64%まで上がり、ほぼ母語話者の3倍に近い。加藤(1999)によれば、発話内の文の文頭や文中で用いられる「まあ」の用法は「展開型用法」であり、自分の主張・見解を発展させ、聞き手に何かを説明したり解説したりする場合に用いられるという。このことから考えられることは、図3で、日本の女性の談話の中に現れる「まあ」の出現数が男性の談話より少ないという男女差の理由には、日本の女性はあまり自分の意見をはっきりと言わず、また相手の注意を喚起しようとする意欲があまり強くないということがあると考えられる。一方、学習者の場合では、中国語という言葉はもともと性差がなく、また女性でも堂々と自分の意見を述べるところが多いことが、学習者は母語話者より「まあ」の発話頻度が高い原因の一つになっているのではないかと考えられる。

#### 5. まとめ

本稿では、中国語を母語とする日本語学習者の日本語会話における「フィラー」の使用状況について考察した。西坂(2001)は、「フィラー」による言葉探しは、多くの場合、自分の発話ターンがまだ継続することを示し、聞き手にターンを取らせず、引き続き自分の発話に注意を向けることを喚起すると述べている。すなわち、「フィラー」は、「フィラー」の種類、音声面・談話上の出現位置、機能・役割、属性などによって、さまざまな機能を果たし、実際のコミュニケーションの場における重要な役割を担っていると考えられる。

従来の日本語教育における会話指導では、文法的観点に重点をおいている傾向がある。しかし、実際の会

図3 日本語母語話者における「マア」の発話状況

項目 \ 性別	男性	女性
マアにおける発話数	70回	1回
全体フィラーの発話数	242回	91回
マアにおける出現率	28.92%	1.09%

図4 日本語学習者と日本語母語話者における「マア」の発話状況

項目 \ 対象	日本語母語話者	日本語学習者
マアにおける発話数	5回	38回
全体フィラーの発話数	268回	674回
マアにおける出現率	1.87%	5.64%

話ではテキストに載っている文だけではなく、載っていない表現もたくさん使われている。福島・上原(2004)は、現代語において丁寧体否定形として、「ません」と「ないです」という形式が並立して用いられていると述べ、「ません」形は、自然会話の中では、会話の初めや新しい話題の開始部など丁寧な改まった文脈での発話で用いられているのに対して、「ないです」形は会話がある程度続いて少し相手との会話に慣れてきた部分やリラックスした文脈での発話で用いられているという傾向があると指摘した。本研究でも、従来の文法的観点からだけでなく、談話の観点から、言語における丁寧度と男女差についてはフィラーにも現れるということが明らかになった。

本稿では、日本語会話における「フィラー」の属性及び出現位置について考察したが、今後の課題としては、語用論の立場から、発話場面や文脈による「フィラー」の機能面について観察することが挙げられる。また、中国語会話で現れるフィラーについても分析し、中国語を母語とする日本語学習者の「フィラー」の発話状況は、どのくらい母語による移転や干渉があるのかについても考察していきたいと考えている。

## 注

- (1) 例：「そして、そのう、そのう、あのう」、「そして、あのう、そして、あのう、そのう」など、フィラーを重ねて連続的に使用すること。
- (2) 副詞的なフィラー：「もう」、「ちょっと」、「やはり」など。接続詞的なフィラー：「そして」、「だから」、「つまり」など。

- (3) 性別・年齢など。
- (4) 『BTSによる多言語話し言葉コーパス－日本語会話1（日本語母語話者同士の会話）』
- (5) 『BTSによる多言語話し言葉コーパス－日本語会話2（日本人と学習者の会話）』。

## 参考文献

1. 定延 利之(1989)「談話構造とフィラー」日本語シンポジウム・言語理論と日本語教育の相互活性化 津田塾会：70-84.
2. 加藤 豊二(1999)「談話標識『まあ』についての一考察」名古屋学院大学 日本語・日本語教育論集第6号：21-36.
3. 郭 蓉蓉(1999)『日本語学習者のフィラーの使用に関する考察－学習段階と学習環境を中心に－』名古屋大学大学院国際言語文化研究科 修士論文.
4. 江 秀姿(2003)『中・上級日本語学習者の会話分析－淡江二技の学習者の実例を中心に－』東呉大学日本語学科碩士(修士)論文.
5. 鈴木 佳奈(2000)「会話における「なんか」の機能に関する一考察」大阪大学言語文化学 第9号：63-78.
6. 福島 悦子・上原 聡(2004)「『言いません』としか僕は言わないです：会話における丁寧体否定辞の二形式」言語学と日本語教育Ⅲ くろしお出版：269-286.
7. 好井 裕明・山田 富秋・西坂 仰(2001)『会話分析への招待』世界思想社.